

学生時代と図書館 53

- 図書館の果たしてきた役割 -

澤田 俊明

私にとって図書館とは、様々な役割を果たしてくれた大変思い出深い場所である。学生時代の私と図書館との関係を考えてみると、図書館の果たした役割は小中学生、高校生、大学生、さらに大学院生の頃ではそれぞれ異なっていたように思える。そこで小中学生の頃から順に図書館の果たしてきた役割を述べていきたいと思う。

小中学生の頃の私にとって、図書室（図書館）は「別の世界」に行くことのできる場所であった。そこにはもちろん数多くの興味を引く本があった。特に私の興味を引いたのは物語である。岩波少年文庫をはじめ、様々なおもしろそうな本が書庫には並んでいた。私は放課後、図書室でおもしろそうな本をどれか1冊手に取ると、すぐに読み始めたものだ。その本がつまらないということも時にはあるのだが、その本がおもしろい場合は完全にその本の世界には入りこんでしまうことがよくあった。この頃読んだ本で今でも印象に残っているのは、ローラ・インガルス・ワイルダーの『長い冬』や『大草原の小さな町』、ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生のサーカス』をはじめとするドリトル先生シリーズである。ローラのシリーズは19世紀後半のアメリカ西部の開拓民の生活を、ドリトル先生シリーズは19世紀のイギリス社会を描いた作品なのだが、そのようなことは当時は全く考えもせず、ただおもしろいから読んでいた。ジュール・ベルヌの『地底旅行』もおもしろかった作品だ。何しろアイスランドにある地球の裂け目から地底にはいっていき、そこには全く別の世界があるという想定のお話だからだ。アイスランドではユーラシア大陸プレートと北米大陸プレートがぶつかっているために確かに地表に裂け目ができているのだ。おもしろい本は放課後の図書室では最後まで読みきれないことが多かったため、そういう場合は「別の世界」からいったん現実の世界に戻り、本の貸し出し手続きをして家に持って帰り、また「別の世界」へとはいっていった。

高校生の頃になると、図書館は「別の世界」へ行くことのできる楽しい場所から勉強をする場所へと変わってしまった。授業が休講になったりすると、図書館で勉強をすることがよくあった。もちろん図書館なので、好きな本を読んだりすることもあったのだが、この頃はそういったことよりもむしろ静かに勉強をすることができる場所としての図書館であったように思う。

大学生の頃の図書館は、勉強をする場所というよりは何かについて調べる場所であった。例えば何らかのテーマについてのレポート作成の課題が出たりすると、まず行くのが図書館であった。卒業論文を作成するにあたって、図書館には大変お世話になった。そのような意味においても、図書館は私が大学生活を送るにあたってなくてはならない重要な場所であった。大学院生の頃の図書館も基本的には大学生の頃の図書館と同じようなものであった。大学院生の頃には、英語の文献で調べることが多くなってきたので、とりわけ同志社大学アメリカ研究所の図書館が大変役に立った。この頃の図書館での「楽しみ」は、書庫の中にはいっていき、自分が必要としている文献や論文を見つけることであった。大学院生の頃私は17世紀のニューイングランド地方のアメリカ先住民と植民地人との関係をテーマとした研究をしていた。その関係で、植民地時代の論文や本の紹介が載っている雑誌が常備されているアメリカ研究所の図書館は、大変役に立った。それに図書館の書庫にはいることによって、私の研究意欲はさらに引き立てられた。

私にとっての図書館は、以上述べてきたように、「別の世界」に行く場所であり、勉強をする場所であり、調べものをする場所であり、さらには研究意欲を引き立ててくれる場所であった。これらすべてが私にとって図書館の果たしてきた重要な役割であった。私の学生時代をふり返ってみると、図書館は間違いなく欠かすことのできない大切な存在であった。

さわだ としあき（教授・西洋史）

